

平成14年度教育実習の成果とその分析

— 今後の指導の方向を探る —

吉村真理子・岡田美也子

Results and Analysis of Teacher Training in 2002: Improving Guidance

Mariko YOSHIMURA, Miyako OKADA

実習指導は、学生および実習校・園の実態をふまえたものでなければならない。本稿では、本学における実習指導の見直しをはかるために、実習後の自己評価と成績原票を照らし合わせながら、実習成果の分析を行った（主な対象は幼稚園実習）。その結果、教材研究や指導の工夫、『教育実習記録』の記載については、自己評価、成績ともに評価が低かった。また、子どもに対する接し方については、実習園と実習生との間に意識の差が見受けられた。この結果を今後の実習指導にいかしていきたい。

1. はじめに

本学では、2年次の6月に行われる教育実習を実習Ⅱとし、実習Ⅰを設けてその事前事後指導を行っている。実習Ⅰは、週1コマ（教授会開催週を除く）として正規の時間割に組み込まれており、およそ1年次後期と2年次生前期に重点をおいて指導内容を構成してある。

今回、実習ⅠとⅡの連携が果たして効果的に行われているか検証すべく、成績原票を基に実習の成果を分析することとした。今年度、初めての調査であるため、検証のための材料が充分とはいいがたい。しかし、今まで各担当者間で、漠然と意識されてきた点を数値の上で見えて、継続調査の土台を作ることに意義があると考え、ここに公表する次第である。

なお、本稿は教育実習委員がまとめたものであるが、実習Ⅰの指導には教育実習委員の他に保育実習委員2名が、実習Ⅱの指導には専任教員全員が取り組んでいることを付記しておく。

2. 自己評価と成績の平均値の比較

幼稚園実習と小学校実習に分け、自己評価と実際に実習先からの評価について、それぞれ項目毎に平均を算出して比較した。その上で、成績原票の総評欄から具体的な問題点を探索し、実習Ⅰの指導との関連について記述した。

なお、自己評価は実習終了5日後の7月3日に実施したものである。

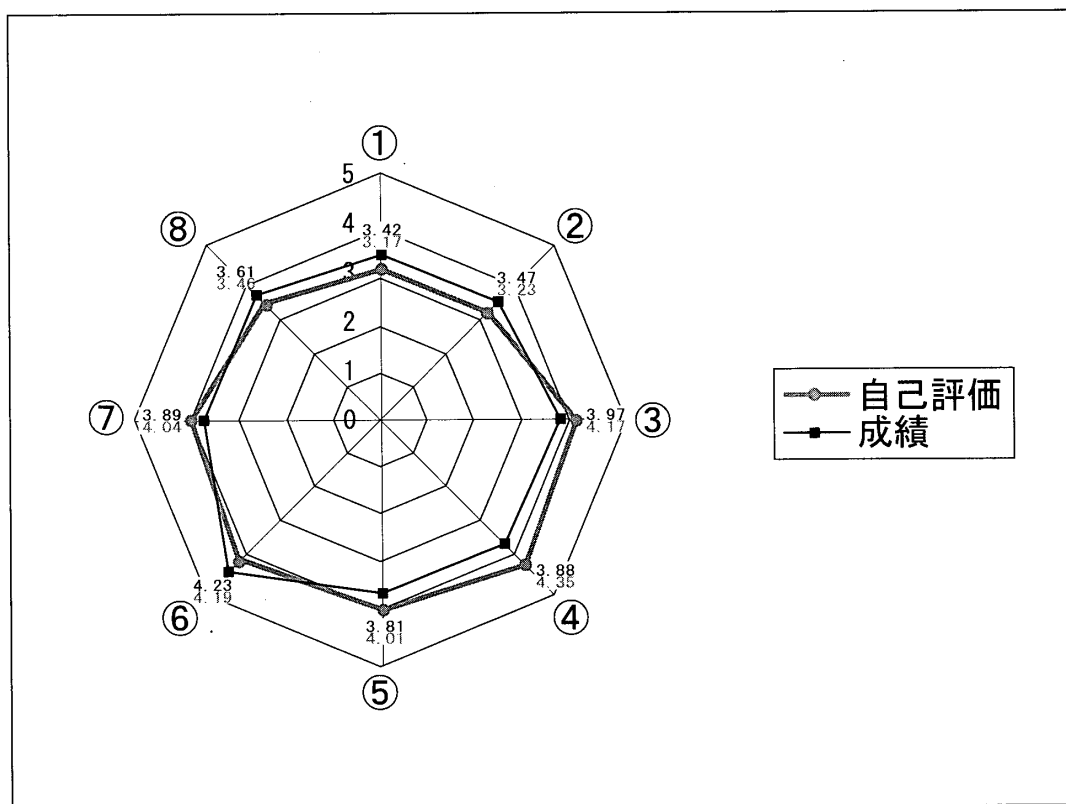
i. 幼稚園

【成績原票 実習園記入欄】（以下の項目について5点法で採点）

評価領域	評価項目
保育指導	①指導方法に工夫がみられたか。
	②教材研究をよくしたか。
	③公平に園児に接したか。
	④園児に積極的にかかわり、良く理解しようとしたか。
実習態度	⑤指導や助言をよく受け入れ、活用したか。
	⑥時間やきまりを守ったか。
	⑦挨拶、言葉遣い、身だしなみに気をつけたか。
	⑧教育実習記録の記載をきちんとまとめたか。

【自己評価および成績】

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
自己評価	3.17	3.23	4.17	4.35	4.01	4.19	4.04	3.46	30.65
成績	3.42	3.47	3.97	3.88	3.81	4.23	3.89	3.61	30.3



標本数—自己評価155（回収158のうち、無記入:項目①—1名、項目⑧—2名）

成績 163

成績が自己評価を上回っている項目—①②⑤⑦⑧（有意差あり①②④⑤）

成績が自己評価を下回っている項目—③④⑥（有意差あり③④）

【項目毎の考察】

例年の実習の成果、また、短大における学業の取り組みや学生たちの普段の様子をふまえて、調査前に予想していたのは次のようなことであった。

保育指導の中でも、①②など、教育や保育の学問的な研鑽が必要な部分に関しては、自己評価、成績ともに高い評価が期待できない。一方、人との関わりは比較的良好で、子どもの中に積極的に入っていき姿勢も認められるので、③④などについては認めていただけであろう。また、特に⑧に関しては、従来の、日誌や成績原票、教育実習校園との懇談会におけるコメントから考えて、高い評価がいただけないことを覚悟している。

しかしながら、①②および③④に関しては、前記のとおり予想と逆の結果がでたことになる。以下、①②と③④に分けて、事前事後指導との関連も合わせて考察していく。

① 指導方法に工夫がみられたか。

② 教材研究をよくしたか。

この項目については、学生の自覚と幼稚園側の評価がほぼ一致していた。

予想と異なり幼稚園からの成績がやや上回っていたのは、「実習生として」という前提で評価いただけた結果であろう。本来、実習生も子どもから見れば教師の一員であるから、甘えは許されない。しかし、“教師”“保育者”が経験から学ぶことの多い職業であることを考えれば、経験不足の実習生が幼稚園側の要求するレベルに達しないこともある。その点に御配慮いただいた上での評価と考えられる。

逆に、実習生側としては、準備不足への自覚があったのか、あるいは実習中に痛感したのか、謙虚にそれを受け止めたものと思われる。

よって、この逆転現象は、指導の工夫や教材研究について評価された、ということには当たらない。評価としては「普通」よりややよいというところである。

総評欄のコメントは、次のようなものである。

①に関して

《発想の乏しさ》

- ・精練実習において、活動内容の事前準備が足りず、発想に乏しかった。
- ・発展性が見られなかった。
- ・精練実習の際のゲームに、手作りの教材等を加えるなど、一工夫があればよかった。

《主体性や積極性の欠如》

- ・部分実習、責任実習では、自分なりの工夫や教材研究がほしかった。
- ・指導方法に関しては、自分なりに考えることが少なく、指導教諭に助けを求めがちであった。
- ・得意分野だけでなく、全体的に積極的に取り組んで欲しい。
- ・指導に関して質問が少なく、積極性が感じられなかった。

《子どもを主体とする保育／子どもの実態に応じた保育》

- ・精練実習で、子どもの予想される行動をよく考えて計画を立てることや、自分の予想と異なった場合への対応がもう少し適切に出来るとよい。
- ・子どもたちを動かすのではなく、一緒に楽しむような活動を考える必要がある。
- ・子ども理解に必要な洞察力、状況を把握して素早く対応する思考力や機転などがやや乏しく、指導案作成に悩んでいた。
- ・精練実習では、自分で立てた指導案を一生懸命に思い出しながら進める姿が見られたが、実際の子どもの様子に合わせてその場での対処ができるとよい。
- ・時間をぎりぎりまで使い、ゆっくりできない部分があった。時間配分を考えるべき。

《年齢への配慮》

- ・精練実習などの内容に関しても、余裕を持って考え、その年齢にあったものができたらよかった。
- ・年長児相手ということもあり、活動に対してもう少しリードしていくことができるとよりよかった。
- ・今後、幼児の成長・発達に必要な保育の工夫・教材研究についての努力を期待したい。

②に関して

《教材研究不足》

- ・指導実習に向けて教材をじっくりとねりこんだり、又、助言をふまえて活用していったりすることができたらよかった。
- ・研究保育に向けて何をやりたいかということが決まっていたが、具体的な内容や教材研究がもう少しできるとよかった。

《試行錯誤する態度》

- ・教材研究が不十分で、いろいろと試すことがなかった。

《保育技術の習得不足》

- ・手遊びを取り入れることが少なかったなので、ちょっとした時間を持って余す時があった。
- ・4月の打ち合わせの時に楽譜を渡してあるので、もう少し短大の方でピアノを重視して欲しい。

- ・ピアノをもう少し努力しておくべき。

もちろん上記の点についておほめをいただいたコメントも見られた。

- ・自作の教材を導入したり、楽しい手遊びをたくさん教えてくれたりし、教材研究にも熱心であった。
- ・絵本等の教材の選び方が上手で、年齢に合うよう研究ができていた。
- ・精練実習でも、早いうちからやりたい物を作ってきて工夫して、子どもたちが楽しめる物ができた。
- ・園児に対する言葉かけや指導方法を工夫し、園児をひきつけようとする姿勢が見られた。

上記のような総評のコメントを照らし合わせるに、次のようなことがいえる。

- ◆教材研究や指導の工夫に対してまずは積極的な姿勢を持つこと
- ◆年齢を考慮した指導を考えること
- ◆自作の教材を作成すること など

1 点目は、「実習態度」と重複する部分である。教材は、さまざまな保育実技の指南書に載っているから、そのまま持ってきて時間も埋めることはできる。しかし、それがどんな意味や目的を持つものかについては、自ら学び考えようとする姿勢がなければ知ることができない。また、指導の工夫に関しても、最初から適切な方法や配慮事項がわかっているわけではないのであるから、特に実習の中でつかんでいくことが大切である。現にコメントの中には、「最初はあまり芳しくなかったが、徐々によくなっていった」というものも見える。結局、マイナスの評価を得た者は、積極性や自主性に欠ける者ということであろう。

2 点目 3 点目は、目の前にいる子どもをしっかりと観察し把握することから始まる。その上で、本に掲載されている案をそのまま安易に持ってくるのではなく、子どもの実態に合わせて工夫せよとのことであろう。その中でも、“幼児の発達を援助する”という点を決して忘れてはならない。

ところで、項目①②は、大学において学ぶ部分に大きく関連する。本学では幼児教育の専門家を養成すべく、カリキュラムの検討、改善を重ねている。しかし、今回の結果は、大学において指導の工夫や教材研究についての指導を強化すること、学生自身が実習の準備として短大での学習にしっかりと取り組みことが要求されたといえよう。中には「精練実習の内容など短大側で指導して欲しい」「短大の方でピアノを重視して欲しい」と明記された園もあった。実習生を評価し激励として書かれていた「更に残された教職の専門性を身につけ、教師として活躍できることを期待したい」という言葉も、卒業までの期間短大での学業の中

で専門知識や技術をしっかりと身につけよ、という意味に受け止められる。

ここで本年度の実習生に対する実習Ⅰにおける指導を振りかえってみたい。

本年度の実習生については、昨年度末から本年度初めにかけて、保育指導案を作成する練習を行った。指導過程としては、次のようなものである。

1. 添削された指導案を例として書写する。
2. 指導案作成の観点と要領についての説明（附属幼稚園の教諭による）をうける。
3. 「一日の中心となる活動」の部分を考え、指導案を作成する。

3については、中心的活動となりえるいくつかの活動例（制作、ゲーム、リズム運動など）をこちらから示した。また、保育士資格課程の設置に伴い、図書館に保育実例が掲載された図書を新規購入したため、それらを利用するように指示した。その結果、そういった図書を積極的に読み、取り入れようとする姿勢はだいぶ見られるようになった。しかし一方で、そういった図書に掲載されたものをそのまま真似するのみで、幼児の実態を想定した上で考えようとする姿勢や、工夫を加えてみよう、手作りの物へ発展させようとする姿勢がないのも確かである。

すでに、こういった反省を活かし、今年度の1年次生に対しては、まず実習Ⅰにおいて、実習を終えた2年生から1年生に対して保育実技の伝授を取り入れた。2年生からは今まさに幼稚園で行われている手遊びの様々なバリエーションや、試行錯誤を重ねて行った精練実習の成果が報告されている。両学年とも意欲的な取り組みが見られる。続けて保育指導案作成の指導、それに基づいた模擬保育などを行う予定である。

あくまで机上で、また学生間で行われるものであり、幼児の実態や各園の教育方針などをふまえることはできないが、これらの活動を通して、基礎的な指導観や教材研究の要点を学ばせ、実際に現場に出た際、工夫ができる余裕を持たせたいと考えている。

③公平に園児に接したか。

④園児に積極的にかわり、良く理解しようとしたか。

項目③④は、成績が自己評価を下回り、開きも大きかった。指導者としての不明を恥じずに述べると、この結果は意外であった。

学生側の自己評価と幼稚園の評価がずれた理由を把握するためには、幼稚園側の要求する「公平さ」「積極的な関わり」と学生の認識との差を精査する必要がある。自己評価の際にも、③「公平に」という言葉に関して、次のようなコメントをわざわざ書き添えている者がいた（いずれも公立幼稚園にて実習した者）。

- ・公平とは違うと思いますが、その子その子それぞれに合った対応の仕方をしていました。

- ・子ども一人ひとりに合わせた接し方をするようにしていたので、公平に接することができていないです。

「個々に応じた対応」と「公平」ということは決して相反することではない。全ての子どもに対してその子に応じた対応ができれば、「公平」なのであるが、その辺りへの理解が学生にとっては困難であると思われる。

成績原票の総評欄にあった実習園からのコメントのうち、③④に関わるものをあげてみる。

③に関して

《対応の偏り／全体把握の不足》

- ・自分の側によって来る子に目をむけがち。
- ・クラス全体を把握することといろいろな子どもに積極的に関わっていくことができない。
- ・自由遊びの時間など、近付いてくる一部の子どもと少人数で遊んでいることが多かったので、全体をみながらいろいろな子どもと接することが必要。
- ・日々の反省の中で一人ひとりのことをどうしたらよいか考える姿勢がよかった。今後、全体を見ていくところまでいければよりよい教師となれるだろう。
- ・子ども達の声を大事にするあまり、クラス全体の活動の際に戸惑う面が見られた。

④に関して

《積極性の欠如》

- ・集団での活動に積極的に入っていけない。
- ・子どもに注意をしたら嫌われるという不安からトラブルの仲介に戸惑う姿も見られた。
- ・園児に自分から積極的に関わっていかず、子どもからお願いされてその通りにするという姿勢が見られた。

《子どもに対する理解不足》

- ・年少組での実習で、やや適応力に欠ける面があった。
- ・見守る場面を個々に応じて設ける必要があった。

これらのコメントから察するに以下のことが考えられる。

③に関しては、全体の把握に関することに集約される。「目の前にいる子どもへの対応に終始し、全体を見ることができない」ということである。これと対応する評価として、個々への対応が丁寧であることを評価して下さった園は多かった。学生の自己評価が成績を上回ったのは、個別への対応を丁寧にしたことで満足感・達成感が生じたためではないだろうか。園児への対応に自分の好悪感情を混ぜたことはない、寄ってくる子どもに対して平等に対応

したという思いも、自己評価の高さに繋がっているかもしれない。

個々を大切にすることが重要であるのは言うまでもない。しかし、幼稚園生活が集団生活を基本にしている場である以上、全体を見渡した上での指導もまた重要である。保育の場面では、例えば、目の前にいる子どもとの遊びに終始せず、その子どもの遊びに他の子どもを引き込む、あるいは他の子どもの遊びとつなげて発展させていくといったことになるであろう。

本学の学生の場合、いかなる場面でも「つなげて発展させる」という姿勢や発想に欠けることが多い。実習指導に限らず、学んだ事柄や日常生活のあらゆる場面に存在している事柄を自覚的にとらえ、それらの連関を見出すことのできるような人間を育成していく必要がある。

④に関しては、実習生故の遠慮や不安、実習への取り組み姿勢などの問題がうかがえる。常に積極的に取り組むように、わからないことや不安があれば御指導して下さる先生に尋ねるように指導しているが、今後も留意していきたい。

また、項目と直結しないが、幼児への接し方という面では、次のようなコメントも少数ではあるが見られた。個々の資質の問題もあろうが、留意しておきたい。

- ・明るさ、元気の良さが足りない面があった。
- ・子どもたちとの生活の中で、感情表現をもっと豊かにすると良いと思った。

上記二点目は、「第2の母のような存在として保育者自身の人間性が生き生きとしていることが大切である」といったコメントに見られる本質的な問題とも関わってこよう。

逆に、項目③④でおほめをいただいた言葉として、「幼児に対して明るく接した」「積極的に幼児にとけこんだ」「子どもたちと一人ひとりとじっくり話をしたり、関わりを深めたりしようとした」といったことはたくさん見られたが、その他としては次のような表現が目にとまった。

- ・1日実習では得意のピアノをいかし、子どもたちと遊びを楽しむ姿が見られた。
- ・園庭などで年齢に関係なくたくさんの子どものとふれ合った。

自信のあることであれば余裕を持って園児に対することができる。それ一つに固執することは論外であるが、得意技を身につけておくことは大事であろう。また、配属されたクラスの子どものだけでなく、積極的に関わっていく姿勢も必要であろう。

⑤「指導や助言をよく受け入れ、活用したか」有意差あり

この点に関しても、①～④と同様、実習生の認識の甘さが表れている。

実習生自身は、御指導を素直に受け入れているつもりでも、態度からはそれが伝わらなかったり、いざ行動を変えていくとなると、具体的にどこをどうしたらよいのかが理解できていなかったり、ということが考えられる。

実習第 1 週目といった初期の段階では、実習生も、保育の流れについていくことで精一杯という余裕のなさはあるかと思うが、疑問点については随時、指導担当の先生方にお尋ねし、確実に理解していくことが重要である。実習生としては、多忙な先生方のお姿を拝見していると、つい質問する機会を逸してしまうということもあるようだが、疑問点が不明確なまま保育を続けていると、かえってご迷惑をおかけしてしまうこともある。タイミングを見計らい、ポイントをつかんで手短かに質問できるようにしたいものである。また、その際、ただ「わかりません。教えてください。」だけではなく、特に、指導案等に関する質問の際には、自分の考えやアイデアを携えて、伺うべきであろう。

さらに、幼稚園の先生方には、直接の保育以外にも環境整備や事務作業等のさまざまな仕事がある。実習生も積極的にお手伝いし、お忙しいなか実習を受け入れていただいている感謝の気持ちもお伝えしていく中で、良い関係ができ、多くの御指導をいただけるように思う。実習生を受け入れる側の大変さを慮る姿勢が必要である。

また、非常に稀であるが、先生方の御助言を批判とのみ受け止め、自分の考えに固執するような不遜な態度を示す実習生がいる。そのような態度では、実習生として失格であるということも、今一度、指導する側としても肝に銘じておきたい。

総評欄のコメント

多かった記載例

- ・実習当初は子どもを前にして、「戸惑い」「緊張」が見られ、「積極的な姿勢」があまり見られなかったが、
- ・次第に、助言を「素直に」受け入れ、「すぐに」次からの行動に活かそうと「努力する」など「熱心」で「意欲的」な姿勢が見られるようになった。
- ・また、「援助の仕方」等に関する「疑問点」があると、「積極的」に「その日のうち」に「質問」し、「自分のものにしていく」など、「学ぶ意欲」や「前向きな態度」が感じられた。

良かった点

- ・やってみたいことを意欲的に持ってきては相談するなど、研究しようとする姿勢が見られた
- ・第 1 週目は、特定の幼児との関わりが目立ったが、保育者の助言を積極的に取り入れ、3 週目には多くの幼児と関わろうとする姿が見られた
- ・子どもたちのトラブルがある度に、どのように言葉かけをするべきか真剣に考え、たくさん質問をしてくれた

- ・アドバイスすると、努力を惜しまず自分で勉強して来る姿は見事である

改善点

- ・早めに準備するよう以前から指導してあった指導案が、用意されていなかった
- ・精練実習の指導案の提出が当日の2日前だったので、ゆっくり助言できなかった
- ・もう少し、取り組みに真剣さが欲しかった
- ・助言を受け入れることはできるが、発展性があまり見られなかった
- ・助言を活用していくことができると良かった
- ・指導が前向きに受け止められると良い
- ・指導しても、実習生の方から質問してくることがほとんど無く、研究心や積極性が感じられなかった

①～④に関しては、実習Ⅰの事前指導の中でも、認識の差があることを示し、指導する必要性がある。

⑥「時間や決まりを守ったか」有意差なし

4.22点であり、8項目中、1番成績のよかった項目である。

遅刻や無断欠勤を厳に慎み、提出期限等を厳守することは、社会人の心構えとして、筆頭に挙げられるものであり、かつ、事前実習でも、実習不合格の最大理由として注意を促しているだけに、実習生としても、その意識は強いと思われる。

本学では、講義への出席が5分の4以上の者に対してのみ、試験の受験資格を与えているが、このように出席基準が厳しくなっていることも、効果が出ているのではないだろうか。

ただし、実習記録や指導案等の提出期限については、なかなか守れず、御迷惑をおかけした実習生も何名かいる。出欠席と同様、提出物の期限についても、日頃より厳しく指導していく必要がある。

総評欄のコメント

多かった記載例

- ・「毎日朝早く」出勤し、「熱心」で「誠実」な実習態度であった
- ・「無遅刻・無欠勤」で、「真面目」に「礼儀正しく」勤務していた

改善点

- ・実習記録や指導案の提出期限を守れないことが残念

・提出された実習記録が不備（抜けている日あり）であり、再提出してもらった他の実習生はクリアしていることであり、職業人として必要なことなので、提出物についての意識をしっかりと持ち、きちんと仕上げるよう心がけてほしい

⑦「挨拶、言葉遣い、身だしなみに気がつけたか」有意差なし

3.87点であり、8項目中、3番目に成績のよかった項目である。

⑥「時間や決まりを守ったか」と同様に、実習生として実習園に御指導いただいている立場であるということの自覚はあると思われる。

ただし、先生方や園児たちへの挨拶はできても、保護者の方々へも自分の方から積極的に挨拶するということができにくいようである。実習期間中は、保育に携わる一教職員としての意識をもつよう、さらに指導していきたい。

また、先生方に対する学生言葉の使用は、実習記録に話し言葉で記載してしまう感覚と同様の点がある。本人たちはおそらく意識できていない点であり、指導にさらなる工夫が必要であると考えている。

総評欄のコメント

多かった記載例

- ・実習態度や言葉遣いが大変「礼儀正しい」
- ・「明るく」「元気に」挨拶できていた
- ・服装や身だしなみも「きちんと」していた

良かった点

- ・自分の方から、保護者に対しても、大きな声でハッキリと挨拶していた

改善点

- ・学生言葉が見られた
- ・表情を豊かにし、元気良く挨拶や受け答えをできると良い、言葉遣いも抑揚をつけられると良い

⑧教育実習記録の記載をきちんとまとめたか。

①「指導方法に工夫が見られたか」(3.42点)、②「教材研究をよくしたか」(3.47点)について、3番目に悪い評価である。8項目中、標準偏差が最大で、個人のばらつきが大きいといえる。

⑧は、①②の保育指導あるいは援助の技能とともに、理論的なことがベースになる項目であり、基本的な学力とも直結してくる項目である。ただし、1年次修了時における短大の成績と、実習成績との相関関係は、今回の調査では見られなかった。保育内容の研究など実習に直結する授業は、2年次に履修する学生がほとんどであるため、これらの成績をふまえると見えてくることもあるかもしれない。

1日の流れを記録する「実習日誌」の部分の記載が不十分であるということか。あるいは、指導担当の先生方の保育を見させていただいての気づきを記録したり、自分の保育の試みに対して反省し、次からの保育に生かしていこうというような建設的な考えを記載したりすることができていないということであろうか。総評欄のコメントとしては次のようなものが目立つ。

《国語力の問題》

- ・誤字脱字が目立つ。訂正されていた部分については、最終的な提出時には直しておくべき
- ・話し言葉のような表現が多く見られたので、文語体で書く方がよい
- ・文章や言葉等での表現力を付け
- ・活動や留意点を表現する言葉を学ぶとさらによくなる

《記載量の問題》

- ・実習記録の空間が多く

これらからは、まず基本的な国語の力（漢字力、語彙力、文章力）や注意力などが、不足あるいは欠如している学生の実態がうかがえる。実習以前の問題である。

もちろん、①～④について見たように、園児を観察する能力（以下、「能力」には、「知識、技能、態度」の三点を含む）、教材について深く考える能力、指導の工夫をする能力が足りないがために、「日誌」「指導案」が書けないといった例もある。

評価をして下さったコメントとしては、次のようなものがある。

- ・とても「詳しく」「細かく」まとめている。
- ・「読みやすい字で」「丁寧に」「要領よくまとめて」内容も適切であった。
- ・書き方もよく理解しており、丁寧に書けていた。
- ・気づいたこと、指導を受けたところをきちんと記入していた。
- ・担当保育者の指導の意図を読みとって記録し、感想反省など細かく書き留めている。
- ・実習で得た大切な記録をまとめることは1番大切なことである。自覚を持ち、実習に臨む気持ちを忘れずにいてほしい。

これらを勘案するに、次のような点が基本的な留意点であるといえよう。

- ◆丁寧な字で、読みやすく書く。

◆指導を受けた内容を記録する。

◆観察記録では、担当保育者の意図をよく理解する。

これらの点については、実習 I および国語（必修）に関して授業改善をさまざまに試みているところである。

例えば、過去の『教育実習記録』における誤字や文法的な誤り、不適切な表現などを分析し、それをふまえて漢字や語彙、表現のテストを実施、また、「日誌」「指導案」の書き方の指導の際にも担当者から特に注意を促している。

また、国語の授業においては、まず毎度の漢字テスト（従来も実施）、悪文例とその訂正などを通して、国語に対する基礎的な知識を学ぶ。そして、それと共に、視覚あるいは触覚によってとらえた物の特徴を伝える練習や折り紙の手順を説明する練習などを通して、物事を具体的に詳しく言葉で表現する能力や相手の立場に立って必要な情報を過不足なく伝える能力を高める学習を行っている。

このような取り組みによって、学生の能力が伸びるよう、今後も力を入れていきたい。

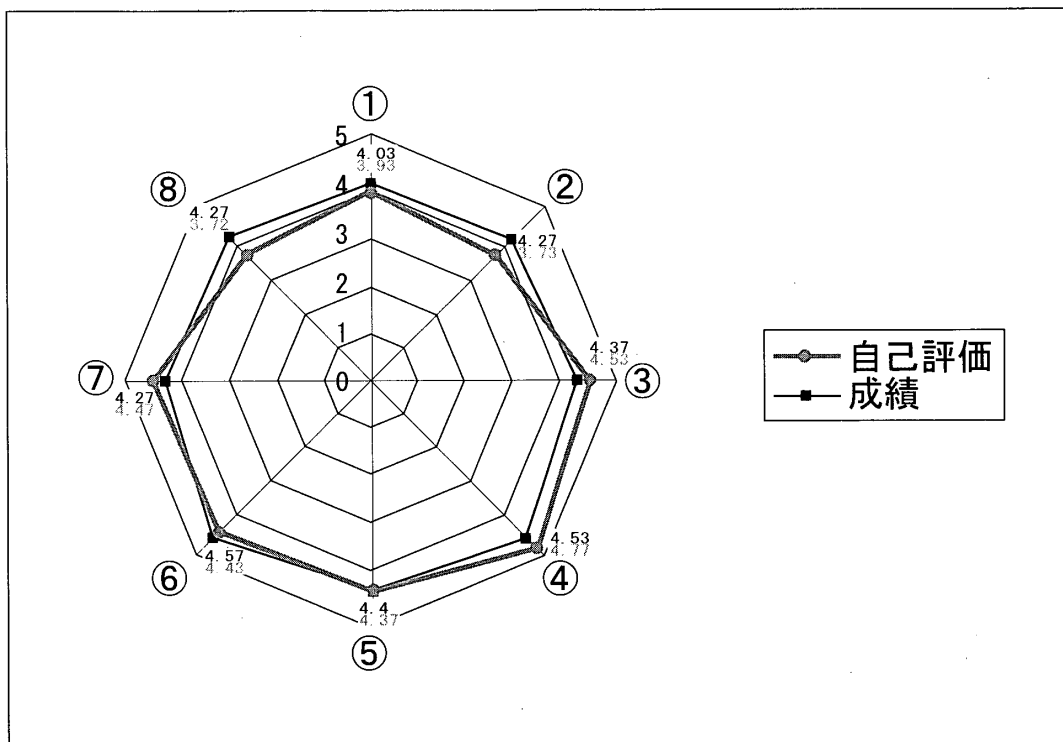
ii. 小学校

【成績原票 実習校記入欄】（以下の項目について 5 点法で採点）

評価領域	評価項目
保育指導	①指導方法に工夫がみられたか。
	②教材研究をよくしたか。
生徒指導	③公平に児童に接したか。
	④児童に積極的にかかわり、良く理解しようとしたか。
実習態度	⑤指導や助言をよく受け入れ、活用したか。
	⑥時間やきまりを守ったか。
	⑦挨拶、言葉遣い、身だしなみに気をつけたか。
	⑧教育実習記録の記載をきちんとまとめたか。

【各項目毎の平均】

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
自己評価	3.93	3.73	4.53	4.77	4.37	4.43	4.47	3.72	34
成績	4.03	4.27	4.37	4.53	4.4	4.57	4.27	4.27	34.7



サンプル数—自己評価29（回収30のうち、無記入：項目⑧—1名）

成績 30

成績が自己評価を上回っている項目—①②⑤⑥⑧（有意差あり②⑧）

成績が自己評価を下回っている項目—③④⑦

【考察】

小学校については、サンプル数も少ないため、幼稚園実習に見られた傾向に対して、補足的に扱うに止めたい。

大まかな点をまず述べると、①②⑧について成績が自己評価を上回った点、③④について成績が自己評価を下回った点が、結果として幼稚園実習と共通していた。

まず、①②については、やはり幼稚園と同様、実習校側が「実習生として」寛大に受け止めて下さったのに対し、実習生側が学習指導を行う中で、自身の力不足、準備不足を痛感した結果と考えられる。幼稚園と異なって項目①には有意差が認められなかったが、これは学生なりに工夫をした結果であろう。総評においても、①②に関するマイナスの記述は、特に見られなかった。

また、⑧は②と同様、幼稚園の場合よりも有意差が大きく、それだけ小学校実習者が『実習記録』（「日誌」「学習指導案」）を書く際に、困難を感じたということである。

教材研究や学習指導案については、実習Ⅰよりむしろ各教科教育法の中でも指導を行うよう担当者に要請をしているが、この結果をふまえてさらに効果的な指導を考えて行きたい。

次に③④についてであるが、これは幼稚園実習と異なり、有意差は認められない。ただし、学生側の自己評価と成績のずれには、やはり学生のイメージする教師像と実習校の求めるそれとのずれが存在していると見るべきであろう。本学の学生は、本実習以外の場面—クラブ活動交流や通学合宿ボランティアなど—において、子どもの中に積極的に入っていこうとする姿勢について評価をしていただくことが多い。しかし、幼稚園と同様、全体への配慮が一つのポイントになろう。下記は、高い評価を得た学生に対するコメントである。

- ・積極的にはたらきかけてくる子だけでなく、全部の子どもに心を配り、真剣に助言をしていた。（評価5）
- ・全員の子どもと関わろうとしていた。（評価5）

幼稚園では見られず、小学校に特徴的であったのは、5の評価をいただいた者へのコメントとして「信頼を得ていた」ということがあった。その他、例えば、教師としてけじめある態度で児童に接することができたか、また、児童の人間的成長を促したり学習活動を援助したりする立場をふまえた関わり方であったか、という点なども問題になってくるのではなかろうか。

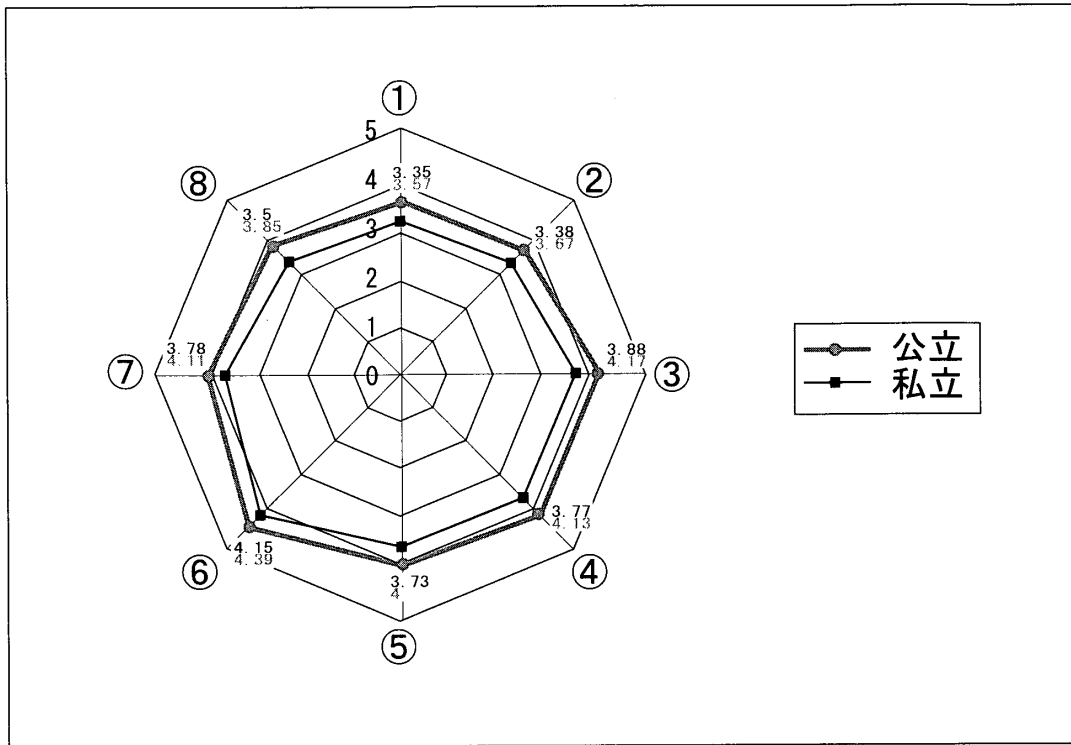
最初のうち子どもの中に入っていけず、徐々に距離が縮んできたということで評価が3という者もいるが、これは個人的資質という側面が大きいだろう。

他の項目については、自己評価と成績の間に幼稚園実習と異なる結果が出たが、有意差が認められなかったこともあり、考察は省略する。

3. 公立幼稚園と私立幼稚園における成績格差

【公立と私立との各項目比較】

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
公立	3.57	3.67	4.17	4.13	4	4.39	4.11	3.85	31.89
私立	3.35	3.38	3.88	3.77	3.73	4.15	3.78	3.5	29.54



サンプル数—公立 46

私立 117

公立と私立の評価基準の相違については、学内でもたびたび話題となっていたが、今回は初めて数値としての把握を試みた。その結果は、次のようにまとめられる。

8項目の合計値 公立31.89>私立29.54

全項目において 公立>私立 差約0.3

基準の差については、公立と私立の性質の違い、さらに各幼稚園の教育方針の相違があるため、分析を差し控えたい。本学が実習生を受け入れていただいている地区（印旛、山武、千葉、船橋、県外）の中には、公立と私立の差がほとんどない地区、公立の方が私立よりも評価が低かった地区などがある。従って、一概に、公立>私立といえない部分もあるといえよう。

今回の結果のうち重視したいのは、公立と私立では、全体的な評価基準に差があるものの、観点による差はないということである。これも各地区によって差があるが、実習生全体を見

た時に上記の結果が出たということは、本学の実習生の傾向がある程度明確になったということであり、私どもの今後の指導を考える上で示唆的であった。

4. まとめ

今回の分析のうち、今後の指導にとっての希望の光は、学生たちが自身の至らなさを実習中にしっかりと認識したということである。自己評価と成績の差は、各項目間では有意差が見られたが、全体として幼小ともに自己評価と成績の差が小数点以下に収まったことに安堵した。

しかし、当然のことながら、本来は実習前に実習生（保育者の卵）として自覚を高めて送り出すことが短大側の責務である。そのためにもどのようなことが必要か。それは、総評欄に書かれ、また懇談会の中でも御意見いただいたことであるが、「目的意識を明確に持たせること／持つこと」であろう。

- ・課題意識がなかったのが残念。

- ・日々実習に臨む上でのねらいの設定にあまり発展が見られなかった。質問や疑問は「ない」と答えることが多く、研究心が見られなかったことは残念である。

等は、保育指導・実習態度すべてに関わってくる問題である。今後、学生たちにどのような形で課題意識や研究心を持たせるか。具体的な方策を考えていきたい。

最後に、実習校園からの評価の基準について。

大まかに考えて、「3」を基準と考えて本当に「優れている」場合に「5」をつけるという考え方、一方、実習生として特に欠点や懈怠が無ければ「5」、何かあればそこから減点していく、という考え方の2通りがあるようである。

3乃至4週間、実習校園にお預けし、御指導を賜っているわけであるから、短大側から基準をお示しすることは難しい。しかしながら、学生がなるべく公平に評価される手だてを今後の課題として考えたい。

注

- ・実習校園からのコメントは、主旨が変わらない程度に変えた部分がある。